

## 第5講：博物館の建築

今回は博物館の建築、そして一般の人との接点である展示室の構造を学ぶ。

建築の語は建物に加え、周辺の工作物や敷地を含めている。

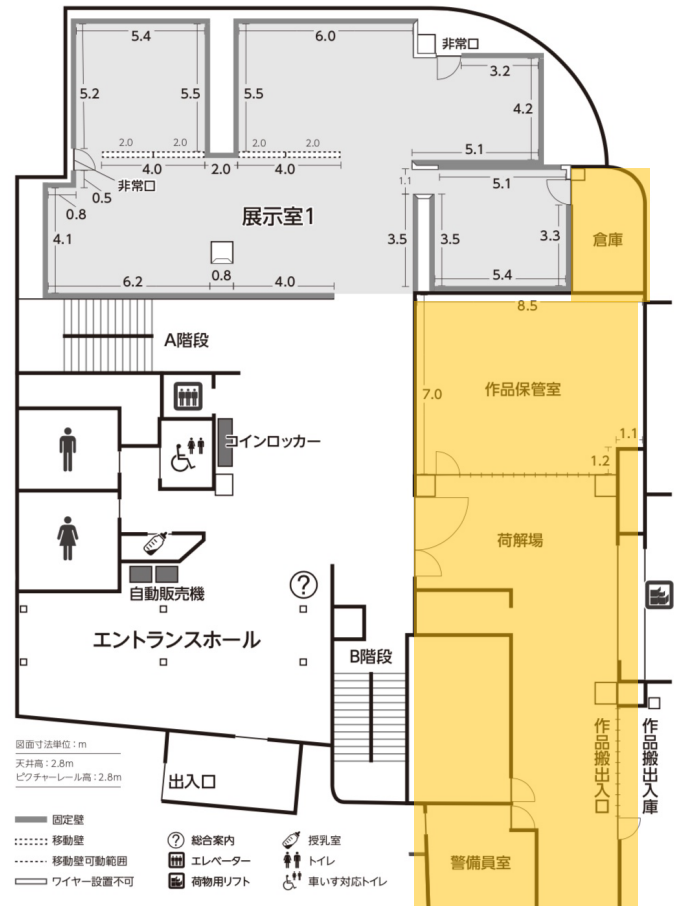
### 1. 平面図に見る博物館の建築

#### 1) 公開区域と非公開区域

公共の建物では内部の空間や外部の敷地について、一般の人が立ち入る公開区域と、職員が利用する非公開区域として分けをしている。この区別は市役所であれば職員と対面するカウンターで区切られており、玄関からカウンターまでの客がある範囲が公開区域、職員の机があるカウンターの内側が非公開区域である。博物館の建築も同様に公開区域と非公開区域とが存在する。そこに着目して建物の内部を考えていきたい。

#### 2) 公開区域

来館者が立ち入る部分、動きの範囲が公開区域である。一部に無料ゾーンを含む。実際の来館者の動きを想定すると、出入口（エントランス）から入館し、ロビーで入館券を見せ、展示を見て、トイレに行き、売店で買い物をし、あれば本を読み、大きな博物館では食事やお茶の時間をすこす。これら一連の動きについて、現用〔現在用いられている〕用語を与え、簡潔に特徴を述べると次のようになる。



横浜市民ギャラリー1階平面図。橙色が非公開部分。白い部分は無料ゾーン [https://ycag.yafjp.org/gallery\\_summary/](https://ycag.yafjp.org/gallery_summary/)

**出入口** 大人数での出入りが可能な開口部、段差がある場合は車椅子やベビーカー用のスロープが必要（入館券の発券と確認の場所は、出入口、ロビー、展示室入口など規模や形態に応じた方法で実施する）

**ロビー** 1学級40人が集合できる面積、ロッカーや自販機が付帯し、机と椅子を備え休憩場所にもなる

**常設展示室** 資料の展示に必要なケースや吊り具と照明を配置し、保存に適した空調を備える

**特別展示室** 常設展示室の機能に加え、独立空間で施錠が可能であることが求められる

**図書室** 来館者向けに図書資料を備えるが、職員も利用する。大規模館では独自に貴重書や写真を収蔵管理する

**講堂** 教室形式の机と椅子、黒板やホワイトボード、投影機器とスクリーンを備える。レクチャールーム

**実習室** 物作りや作業を伴う行事に用いる。学校の工作室や理科室に準じた設備となる

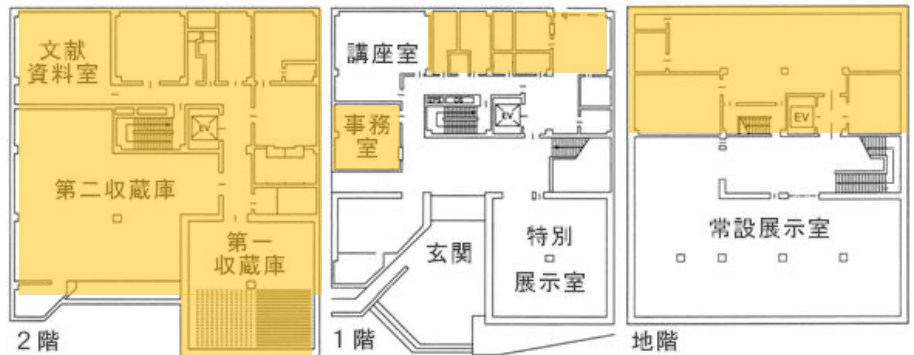
**トイレ** 多様な利用者に配慮した作り、利用人数に配慮する。施設によっては子ども用にも設備する

**売店（ミュージアムショップ）** 博物館に応じた品揃え、他では入手困難な商品や独自図書を備えるとよい

**喫茶店、食堂（カフェ、レストラン）** 一般事業者による経営が好評のようである

## 2) 非公開区域

博物館の最重要機能、保存の機能は非公開区域にある。保存のための空間を収蔵庫 [しゅうぞうこ] と呼ぶ。博物館の心臓部であり物置や倉庫とは呼ばずに区別している。まっとうな博物館であれば資料の大半は収蔵庫にあり、展示されているのはごく一部である。



さいたま市立博物館の平面図。非公開部分が過半である  
<https://www.city.saitama.jp/004/005/004/005/008/003/p009318.html>

学芸員の研究室や事務員の執務室、警備室なども非公開区域である。通常、学芸員は展示室などの公開区域に居ることはない。バックヤード (Back yard) と言うことがある。メディアが使う「裏側」は否定的な意味を持つので使わないこと。

しゅうぞうこ

収蔵庫 資料の保管庫。空調は24時間だが照明は必要時のみ点灯し普段は真っ暗。壁面は結露防止に配慮する

くんじょうしつ

燻蒸室 外部から収蔵庫や展示室に資料を搬入する時に殺虫防カビ目的に薬剤にさらす場所

にときしつ

荷解室 外部から搬入した資料の梱包を解く場所。また館内の温湿度に慣らすため未開梱のまま資料を留置く場

研究室 学芸員や研究員の居室。小規模館では事務室と一緒にしている

事務室 事務員の執務室。小規模館では受付

ほかに館長室、実験室、作業室、警備室、休憩室 (清掃などの外部職員も利用する)、(エレベーター) 機械室、電気室、ボイラー室などがある

## 3) 外構

外構 [がいこう] とは本体建物の外の敷地部分にある工作物や植栽、道路や歩道の部分である。外構にも公開部分と非公開部分とが存在する。市街地では外構部分がほとんどない博物館がある一方、植物園や公園のなかに博物館が設置され外構部分のさらに外側にも関連施設が広がる場合もある。郊外では広い敷地を長く歩く設計も見かけるが、雨天時や熱中症対策を考えると疑問が残る。

アプローチ 敷地入口から建物までの経路。植栽が見られ、展示に関連した内容のこともある。階段は避けたい

野外展示 資料の性格や大型資料では屋外に展示することも見られる

関連施設 温室、屋外展示の上屋、管理小屋など

## 2. 建築のポイント

### 1) 立地

博物館の売店のをこ入れに派遣されていた百貨店の社員が語っていた言葉があ



徳島県立博物館は図書館や文書館と一体となった公園に位置する  
<https://museum.bunmori.tokushima.jp/guidance.html>

る。「小売業というものは、一に立地、二に立地、三四がなく、五に立地」。有名百貨店では大規模博物館の年間入場者にあたる数十万人という人数がセール期間などでは1日で訪れる。それに引き換え日本の博物館の立地は世界的に見ても悪すぎる。とくに県立大型館では、ローカル線で数十分、最寄り駅からバスに乗り、バス停からさらに歩いて15分という場合、公共交通機関がなく駅からタクシーなどという車での来館が前提の施設も存在する。遠隔地であっても歴史的文化的に意味がある場所ならば納得もできるが、そうでない場合は博物館の置かれた状況（=不要不急施設）を実感することとなる。

博物館が立地を変えることは極めて困難で稀である。今後の新規設置も少ないと考えるが、立地の選択には下の条件を考慮することが望ましい。

- 地域の歴史・文化・自然などの特性
- 周辺人口・他施設の集積度などの環境
- 周辺環境・地域の博物館化
- 防災・避難機能
- 交通アクセス

## 2) 避けたい神社配置

神事的建築とは便宜的な言葉である。神社は長い参道を歩き、階段を上った奥に本殿や拝殿が配置されている。あがめる神殿を高い場所に置くのは当然だが、博物館はあがめる対象だろうか。現実には博物館の建物入口に至るまでに階段があることが通例であり、神殿のように長い階段の上に建物が置かれていることもある。車椅子やベビーカーは脇にある専用の入口を利用するが、健常者とそれ以外を区別する設計は差別された印象を残す。健常者にとっても荒天時は早くに建物内に入りたい。

立地条件や防災に配慮して高い場所に建築する場合でも、出入口は階段を上らずにアクセスできるようにし、階段は建物内部に置くべきである。平面的な奥行きが過剰なケースも見られる。建物にたどり着いても入口が奥に配置され途中で雨に濡れるような建物は人間に優しいとは言えない。

## 3) デザイン

博物館、とくに美術館の建築はそれ自身が芸術作品といえるような建物も存在する。建築は入館者の博物館体験にも影響し、外観も内部もデザインは重要である。その一方、奇抜なデザインのために使い勝手が悪い建物や資料の保存には不向きな博物館建築が実在する。きわめて大雑把にいうと、建築業界で評判の建物は学芸員からは評判が悪



上：三重県総合博物館 博物館は2・3階部分のため出入口が2階にあり階段がそびえる  
 中：ぐんま昆虫の森 ガラス天井から陽が差し込む明るい空間は図書館、高い場所の本を取るはしごが左端に見える  
 下：兵庫県立近代美術館 歩いてたどり着いたが受付は最深部。途中は雨が降る開放空間

い。そのような建物は見た目や偉い人の視線を意識するあまり、資料の保存環境、室内の断熱や採光、機器の配置や職員の日常の使い勝手が犠牲になっている。

デザインには発注者である博物館側より建築事務所のこだわりが優先する場合もある。なかには機能上の問題が見られることもある。ニューヨークのグッゲンハイム美術館の展示室はらせん状の回廊が続き階段なしに1階から5階相当の高さにまで昇る。画期的な建築だが、段差が無い反面、作品と床面が常に平行にならず来館者は不安な印象を持ってしまう。デザインとは見た目の美しさや心地よさと機能とを両立させることであり、それを目指した建築が望ましいと考える。

Solomon R. Guggenheim Museum | 空間芸術研究所/vectorfield architects

<http://vectorfield.net/2015/11/11/solomon-r-guggenheim-museum/>

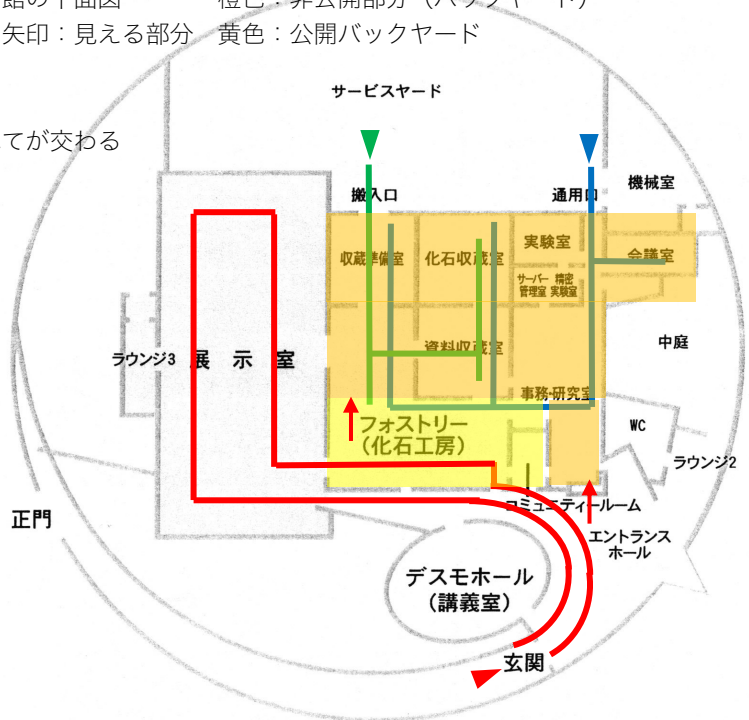
日本でも博物館の建築は各地で数々の経験を積み、さまざまな常識が蓄積されてきた。実際には同じ失敗を各地で独自に繰り返してきたことも事実である。

#### 4) 防災と災害対策

20世紀末から博物館や文化財保護で特に意識されるようになったのは、防災と災害対応である。これには1995年1月17年の阪神・淡路大震災と2011年3月11日の東日本大震災が大きく影響している。

防災は地震や津波、火災や水害などの災害を未然に防ぐ観点、災害対応は災害時に博物館が避難所や対応の拠点施設となる機能を備えることである。博物館は後生に伝えるべき貴重な資料が多数保存されている。そのために十分な対策をした建築は立地や建物は災害時には命を救う避難所としても最適はずである。対応には実用的な手すりの設置やわかりやすい案内表示のなど細かな配慮も必要である。とりわけ沿岸部ではその意味が大きい。現時点で実現した博物館建築は少数であるが、今後の博物館建築は防災と災害対応を取り込んだものになっていく。

足寄動物化石博物館の平面図  
 赤：観客動線 矢印：見える部分 青色：非公開部分（バックヤード）  
 青：職員動線 黄色：公開バックヤード  
 緑：資料動線  
 ○化石工房ですべてが交わる



### 3. 動線

#### 1) 動線とは人や物の経路

動線とは文字通り人や物が動く線である。ここでは博物館の建物内部全体での動線と、展示室内での動線の2つを考える。動線を考えることは博物館だけでなく、駅や空港、ホール、病院などでもおなじである。病院では通路に目的の診療科へ導く色テープが貼ってあるのを見た人もいだろう。空港では滑走路や誘導路から駐機場までの飛行機の動線があり、フェリー乗り場や駐車場では自動車の動線が設計されている。

#### 2) 観客（来館者）、職員、資料の3動線

博物館の建築では設計段階で考慮すべき動線は3つ存在する。来館者（観客）動線、職員動線、そして資料動線の3つである。簡潔に説明すると下のようまとめられる。通常、博物館の来館者は学芸員に出会うことがない。

来館者（観客）動線 展示の観覧を目的とし時に行事へ参加する来館者の動線。公開部分のみを歩く

職員動線 来館者とは異なる職員玄関から出入りし非公開部分を歩く。

来館者との接点は無いか事務室窓口

資料動線 資料専用または職員玄関から出入りする。非公開部分の収蔵庫と公開部分の展示室を行き来する

以上の動線では来館者と職員との接点は大規模館では全く無いことが多く、小規模館では事務室兼研究室の受付窓口に限られる。それでは学芸員と一般市民との距離ができてしまうため、学芸員が当番でロビー付近に待機する博物館、あえてすべての動線が交わる空間を置き、資料と職員、来館者が一体となる体験と提供する博物館もある。

### 3) 動線の決定点

3つの動線を簡単に説明したが、それぞれの動線が途切れたり行き詰まる場所がある。そのようなことが無いように建物や敷地を設計するのが当然と思うかも知れないが、現実には信じられないようなボトルネックが存在する。

資料動線であれば、資料を輸送してきた大型トラックが搬入経路の回転半径や建物のひさしの関係で入れない、入れるが傾斜が急で資料保護のために荷台上でのジャッキによる水平確保の作業が必要、展示室の天井高は十分なのに出入口の開口部が低く資料が持ち込めない、来館者動線であれば先に言及した出入口に至る階段、馬蹄形の通路の両端に階段があるがエレベータは片端だけ設置されておりフロアの移動に通路を逆戻りする状況、職員動線ならエレベータが無いために重い書類箱を手を持って階段を移動するなど、暇【いとま】が無い。

### <参考文献>

岡野眞. 1990. 記念展示館の計画と設計. 建築設計資料28記念展示館, pp.4-32. 建築資料研究社.  
岡野眞. 2002. 拡張型博物館の計画と設計. 建築設計資料88拡張型博物館, pp.4-28. 建築資料研究社.  
安田幸一. 2008. 水族館の設計法. 建築設計資料110水族館, pp.4-32. 建築資料研究社.

[gairon2025\\_5-2.pdf](#) 博物館水族館建築概念図 (岡野 1990, 2002、安田 2008)

[gairon2025\\_5-3.pdf](#) 水族館建築平面図集 (安田 2008)

### 【本講の要点】

1. 博物館の建築は公開区域と非公開区域からなる
2. 博物館の建築で必ず必要な空間は収蔵庫である
3. 博物館の建築の注目点は①立地②車輪での移動③デザイン④防災と災害対策である
4. 動線は①資料②職員③来館者の3種類を想定する
5. 動線は①車輪での移動②資料の外箱寸法③資料の輸送機材も想定する

2893

モノ（資料）から出発する建築



湧別町立ふるさと館 JR Y

二階の展示室は馬蹄形で階段は両端にあるがエレベータは1か所のみ。利用者は通路を逆進して対岸に戻る必要がある